

リリカルサバイバー

タカノ

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

山手線内で若者に人気の街、渋谷。

そこに遊びに来ていた少女達は偶然にもCOMPを手に入れる事になる。

悪魔の出現。山手線の封鎖。

果たして政府と管理局の思惑とは？

リリカルマジカル、始まります……いえ、生き残ります。

目次

第一話	一日目前半	1
第二話	一日目後半	13
第三話	二日目前半	25

第一話 一日目前半

「君は悪魔と言う存在を信じるかい？」

それは歌舞伎町の前で携帯を見ていた時に、ふとかけられた声だった。

軽薄そうなスーツの男は柔かに……そして、何処か小馬鹿にしたように続ける。

「いやいや、いきなり信じるか？　と言う答えは性急かな。だけどおかしいとは思わないかい？」

男の言葉はそれほど気に止めるものではない……俗に言う電波系なのだろう。ただ、何故か耳を傾ける……注視してしまう雰囲気があった。

「そもそも、この世界に人間だけが知恵を持つてるとは、何ともおこがましい話だと思わないかい？」

視線は携帯の画面から完全に男に移っていた。

それは、ガチャでSRが出たのが気にならないくらいに。

「だけど、どうやらそんな日常もすぐに終わってしまうようだよ？　いやー残念だねえ」

何が……そう言いかけた時、すでに男はいなくなっていた。

あれは何か白昼夢みたいなモノなのだろうか？
いや、あれは……。

一日目

「ほらほら、こっちのワンピースもいいと思わない？」

「もう……アリスちゃん速いよ……」

人がごった返す渋谷の道玄坂の昼。

それは平日とは言え多くの人で賑わっていた。とは言え夏休みに入ったのもあり若者の数はいつも以上に膨れ上がっていたわけなのだが。

元気に街を周る二人の少女の服装は同じ制服……聖祥大附属中学の物だった。

小学校時代は長く伸ばしていた髪を肩口までに切り揃え、一気にスポーティになった少女……アリス・バニングスは傍らにいる小学校時代からの親友に声をかける。

「だって、渋谷だよ。やっぱり海鳴とは違って欲しい物がいっぱいあるし……こう、わくわくするじゃない？」

傍らにいる少女は、その言葉に納得したように微笑むと「そうだよね」と、その隣に

歩み寄る。

アリサとは対照的に小学校時代から変わらぬ髪型のまま大人びた少女……月村すずかは思う。

（「なのはちゃん、フェイトちゃん、はやてちゃんも一緒に来れば良かったんだけど……」）

二人とは小学校時代からの親友である高町なのは。そしてフェイト・T・ハラオウン、八神はやて。三人とも合流して今日の買い物をする予定だったのだが、三人共仕事が入ってしまったらしく、今回は二人での買い物となったのであった。

「すずかーボーっとしてないでこっちのコーナーも見に行くわよー」

「あ、待ってよー」

とは言えせつかくの都会に出て来ての買い物、楽しまないと損と言う物である。

そう考えを切り替え、すずかはアリサに向き直る。

「じゃあ、次はあの有名な109に行ってみようよ」

うん、楽しまないと。

「あー面白かったー！」

「うん、そうだねー」

からんつと空になったグラスの中で氷が踊る。

日陰に入ったオープンカフェとは言え、この季節の日差しは暑い。

あつという間に空になったグラスを持って余しながら二人は次の予定を試行錯誤して
いた。

「うーん……やっぱデザートは翠屋の方が上かなー」

「もう、そんな事声に出して言っちゃダメだよ」

私もそう思ったけど。そんな言葉を飲み込みながら。

「……ねえ、すずか」

それは突然だった。

今までのアリサからでは想像できない、重い声。

すずかは一瞬で気配が変わった事に気がつき慎重に言葉を選ぶ。

「……どうしたの？」

聞き返しはしたが言いたい事は分かっている。

年も変わらないのに戦っている大切な三人の友人の事だろう。

「何か悔しいよね、私たちには何もできないのかーって」

「アリサちゃん……」

「せめて、私たちにも戦える特殊な力とかあつたらねー」

そのアリスの何気ない一言はさすがの胸に深く突き刺さる。

それは、戦える力を持たない同士だから……では、無い。

何故かと言えば、さすがが中途半端にしか戦えない力を持った化物の出来損ないだからだ。

少なくともさすがは自分の事をそう思っていた。

『夜の一族』

力は薄れてしまっているが、吸血鬼。人とは異なる存在の一族なのだから。

その為さすがは見かけによらず幼少の頃から運動が得意であった。ただ、それもこの血のなせるモノである。

そんな化物みたいな力だが、それでも友人たちが戦っているような相手に太刀打ちできぬものでも無い。

さすがの力では成人男性とやり合うくらいが精一杯だろう。

叔母や叔父は力が強く、超常的な力を振るえると聞いた事がある。

姉である忍も身体能力はそこまで変わらないが、いざとなれば視線に力を込める事ができる。

だが、さすがの力は身体能力の僅かな向上くらいであった。

これで、『あの発作』までであると考えると割に合わない。

そんな事もあって、さすがは自分の力が嫌いだっただけ。

（「なのはちゃんのお兄ちゃんみたいに、受け入れてくれる人がいればいいけど……」
なのはの兄である高町恭也……は、姉である忍の恋人でもあり、夜の一族を受け入れた数少ない人間だった。

「……つか！　　さすがっ！」

「へ………？　　……あ、ゴメン」

「もう、ボーっとしてないでよね」

怒ったように頬を膨らませるアリサ。さすがが申し訳なさそうに謝ろうとした時、アリサの手にある機械が目に入った。

その様子が目に入ったアリサは機械をテーブルの上に置き。

「さっき、そこであの噂の宗教団体の……ナントカ会だっけ？　　その人が配ってたの」
ナントカ会って全然覚えてないよね？　　とはけて表に出さず機械をじっくりと眺める。

「これ、COMPだよね、情報端末の。無料で配ってるって事は何かのサンプルなのか
な？」

「COMPって何だっけ？」

「コミュニケーションプレイヤー、通称COMP。今結構流行ってるんだけど……知

らない?」

「さあ? あーなのはがいたら詳しいのに」

どうしたものかと天を仰ぐアリサの仕草に、思わずクスッと笑ったはずかはその機械を手に取り、アリサに向き直る。

「まだ日も出てて暑いし、木陰のベンチにでも座ってこれで時間潰してみようか?」
人気の無いベンチに腰掛けCOMPを二人で起動させる。

電源が入り、いつものCOMPのタイトルが始ま……らず、意味の分からない文字の羅列が高速で走りすぎて行く。

「ちよ、ちよっと、何コレ? 壊れてるの」

「わ、わわ」

意味の無い文字の羅列の後、一つの文章で画面が止まる。

其処には。

『Devil summons program start』

瞬間、画面が光に包まれ中に魔法陣が展開される。

「な、なによこれ!」

「……え?」

眩い光が落ち着くと、其処には見た事の無いモノが存在していた。

子供くらいの大ききで全身真っ黒な鳥のような生き物。

そして、インドの民族衣装のような物を着た少女。ただし、その子の影はとても人とは思えない姿をしていた。

色々な事が起こりすぎて理解が追いつかないが、少なくともこの状況が異常なのは二人にも理解ができた。

その次に訪れたのは、異形に対する恐怖。

以前になのはたちの戦いに巻き込まれた事があったが、そんなのとはまったく別次元の恐怖。

「ケケケ、ヤットジユウニナレタゼ……」

「ちがうよ、まだじゆうにはなっていない。あのおねえちゃんたちをころさないと」

「ケーツ！ メンドウナハナシダゼ」

目の前の二匹が物騒な事を言っているが、二人の耳には入らない。否、それどころではない。

「……あ……あ……」

「ア、アリサちゃん、逃げよう！」

さすがが咄嗟にアリサの手を取るが……目の前にはすでに少女が近づいて来ていた。

「だめ、にがさないよ。わたしたちのじゆうのために……しんでね」

瞬間少女が何か呪文のような言葉をつぶやいたと同時に、すずかの体に強力な衝撃が走る。

巻き込まれ、なぎ倒される街路樹を見て、すずかは決心する。

（「最悪、腕の一本やられても私なら大丈夫……！ 早くアリサちゃんを……」）

其処で、はたと気づく。

いくら化物の血を引いてるとは言え、耐久力は普通の人間とさほど変わらない。

なのに、街路樹が倒れるような攻撃を受けて、何故自分は立っているのだろうか。

試しに手を握る。そして、力任せに思いっきり振り抜く。

自分には叔母のような鋭い爪は無い。なのに、その一撃は完全に不意を打つ形で少女の顔面を捉え、壁の端まで吹き飛ばしていた。

（「私は……戦える！」）

「す、すずか……？」

やっと正気を取り戻して来たのだろう、アリサは目の前の光景を見て驚愕した表情を浮かべていた。

そんな親友の表情にチクリと胸が痛みながらも、すずかは前を見つめる。

「良く分からないけど、戦えそうな気がするよ……アリサちゃん」

「え、えーい！ やってやろうじゃないの！」

こうなりやヤケだ！　と言わんばかりに素人ながらも構えるアリサ。

それは、偶然にも先ほど二人が話していた、戦う力。それを手に入れた瞬間だった。

「ケケケ！」

黒い化物が叫び声と共に炎を吐く。

炎を体に浴びながらもアリサはこらえ、前に歩む。

「クエツ!?!」

「熱いじゃ……」

そして、思いつきり腕を振り上げ。

「ないの！」

全力で叩き下ろした。

「ギャー！……マイツタ、ニンゲン。ケイヤクトオリニアンタニツイテイクカラ、タ

スケテクレ」

「……契約？」

「ソウダ、オレハキョウウチヨウオンモラキダ。コンゴトモヨロシク」

そして、その化物はまた光になったかと思うと、アリサのCOMPに吸い込まれて

行った。

「……はい？」

其処にはさすがかのフォローも忘れるくらいあっけに取られているアリサの姿があった。

「はっ！」

「あう……もう、おねえちゃんしつこいよ」

少女が自分の腕を振るえば、影も連動して地面から殴りかかってくる。

すずかはそれを紙一重でかわすと、お返しとばかりに貫手で少女の胸元を捉える。

確かな衝撃。その一撃に咳き込み、少女は降参の意思を示すためか両手を上げてその場に立ち尽くす。

「うん、こうさん。ざんねんだけどけいやくだし、これからおねえちゃんについていくね？」

「契約って?」

少女の言葉の意味が分からず首を傾げるすずかに少女がニツコリ微笑む。

「わたしは、きじよあちえりだよ。こんごともよろしくね、おねいちゃん！」

その言葉を残して、少女も光となつてすずかのCOMPの中に吸い込まれていった。

「……」

声もなく、その場に立ち尽くす二人。

どれぐらいそうしていたか、やがてゆつくりと……そして深く息を吐き、アリサはす

ずかを見つめる。

「……………とりあえず……………移動しましょう」

「……………そうだね……………」

それが、まだ始まりにすら過ぎなかつた事を、この時の二人は知る由もなかつた。

第二話 一日目後半

「さあ、物語はかくして始まった！ わけだが、これは面白いね」

何が面白いのか、スーツを着た軽薄そうな男は、さも愉快だと言わんばかりに声をあげていた。

「物語ってモノはいくつもの分岐があつてしかるモノだが、今回のケースは珍しいねえ」

男が愉快そうに笑う中、周りの無数の人影は一瞬目を向けるが、また視線を元に戻し作業を再開する。

「イレギュラー。そう言えるのかも知れないね。おやおや、これでは折角のカイン君の計画も台無しかも知れないねえ」

びちゃり。

そんな擬音を立て、彼は何処に行くわけでもなく歩みを始める。

人であつたモノが散らばる裏路地の中を。

一日目、夕方

「……」

「……すずか、大丈夫？」

ただ闇雲に走って、走り切って、その場のベンチに座り込む二人の少女。

あれ以降一言も喋らない親友に対してアリサはどう声をかけるべきか悩んでいた。

（「確かに、あんな目にあつて平気でいられるわけないし、此処は私が何とかしないと……」）

元来アリサの勝気な性格は生来の物ではない。普通の子供とは違う立場にいらなくて
はならない自分。

そんな様々なしながらみが彼女を勝気な性格にしていたわけだが、生来はお人好しな面
倒見の良い性格だ。

だからこそ、混乱してる親友の為に自分も自分が何とかしなくては！ そんな気持ちがあ
りサの中にはあった。

「で、さっきの化物なんだけど」

ぴくりっ。とすずかの肩が動く。

「どうやらこのCOMPの中に収納されて……呼び出すと自分の味方になってくれるみたいだよ？　これが契約ってヤツなのかな？」

「さすがの反応こそは無いが、話を聞いているのを確認するとアリサは続ける。

「とにかく、これがあると私たちでも戦えるみたいだね！　こう、なのはみたいにビームとかが出ればいいんだけど」

「……もう、あれはビームじゃなくて魔法だって、なのはちゃん言ってたよ」
少しはにかんだようにすずかが顔を上げて話す。

「まあ、似たようなモンでしょ。でも、この機械他にも何か機能がありそうんだけど……良く分からないんだよね。特に謎なのが……コレ」

アリサがすずかの頭の上辺りを指差し。

「この頭の上の数字。これって一体何なんだろう？」

「数字？」

アリサの言葉に小首をかしげて答えるすずか。そのすずかの反応に訝しみながら。

「ほら、この頭の上の『3』って数字。私のはどうなってる？」

「え……えつと……話が見えないんだけど……」

しつこく追求しようとして、ふと思いついて止まる。アリサは何か思いついたかのように腕を組むと……。

「……もしかして……すずかには見えてない？」

「もしかしなくても、うん」

「あー……ゴメン。どうやら私だけみたいだね。何なんだろう、もう少し調べてみようかな？」

そう言つてCOMPと睨めっこし始めるアリサを横目に、すずかは考えていた。

『化物』

あれは確かに人外の存在であつた。

もしかしたら自分たちと繋がる種族なのかも知れない。

だとしたら、自分もあなつてしまうのだろうか？

そもそも契約とは？ 夜の一族が秘密を話すのも契約とは言える。では、それとは違うのか？

ぐるぐるした頭の中でいくつもの思考が、無意味な記号のように羅列していく。

「……すずか、すずか！」

そんな意識を呼び戻してくれたのは、親友である少女の声だった。

「ゴメン、アリサちゃん」

「もう、本当に大丈夫なの？」

「うん……大丈夫」

力なく頷くすずか。それに対して口を開こうとして……そのまま肩を竦め、また作業に戻る。

しばらくそうやっていた時、視界が急に暗くなった。

何てことは無い、付近の街灯、店の灯りなどが一斉に消えたのだ。

「え？」

「停電？」

周囲の明かりが一斉に消え、辺りが一気に暗く染まって行く。

この時期の18時過ぎくらいならば、そこまで暗くは無いがそろそろ明かりが無いと不便にはなるだろう。

「……復旧しないね」

「あー流石に夜もこれだと困るんだけどなー」

とりあえずその場で時間を潰してみたが、一向に停電が治る見込みも無い。むしろ、空がどんどん闇に覆われて行き、状況は悪化して来たとも言える。

「ともかく、移動しようか？」

アリスがそうすずかに声をかけようと振り向いた時、奇妙なモノが視界に入った。

黒い馬に乗った美形の白人男性の姿。

それだけ言えばおとぎ話の王子様だが、そんな気配は微塵も感じない。

その手には西洋剣と思われるものを持ち、身に纏っている雰囲気ですでに普通ではない事を滲み出していた。

「ほう、このような場に可憐な少女が二人か……これは運が良い」

白人男性は流暢な日本語で……いや、そもそも日本語なのだろうか？ 聞こえる響きをもっと別な……何処の国とも取れない言葉だった気がする。だが、何故か二人にはその言葉がしつかりと聞き取れていた。

「先ほどの召喚者のマグネタイトではいささか不満があつたところだ。やはり、清らかな少女のマグネタイトに勝るモノはないからな」

「な……なんなのよ、アナタ！」

男性の独特な気配に気押されながらも……良く分からない恐怖感を押さえ込んでアリスは怒鳴りつける。

間違いない。アレは関わってイイモノじゃない。そう本能が言っているが、ずずかを置いては行けない。

だからこそ、懸命に勇気を振り絞ってアリスは男性の前に立つ。

「ほう、これは失礼した」

男性はアリスの気迫を真正面から受け流し、仰々しくも礼をし。

「私の名は、セエレ。貴女方の命を頂こうかと思えます」

言うが早し。セエレが横風に剣を振るいアリサの首元を狙う。

「！」

間一髪しやがんで攻撃をやり過ぎ、後ろに転がり距離を取る。

それを見てさすがも自分のCOMPに手をかける。

「アチエリ、お願い！」

さすががCOMPの操作をすると、画面から魔法陣が展開され、その中から以前の少女が召喚される。

「うん、おねがいされた。まかせておいておねえちゃん」

アチエリを召喚しずか自身も一緒に前に立つ。

（「大丈夫……今の私ならやれるはず」）

「それじゃあ、私も！ 出番よ、オンモラキ！」

立ち上がり、アリサもCOMPを操作する。展開される魔法陣。その中からオンモラキが姿を現した。

「ケー！ イキナリアクマツカイガアライマスターダゼ。マア、マカセロヨ」

アチエリが影の腕で殴りかかり、それをかわした先にオンモラキのブレスが襲いかかるが、そのブレスもセエレは簡単に回避する。

「ほう、使役された悪魔か……不憫だな。私が君たちを開放してあげよう」

「そういうのをありがためいわくつていうんだよ、おにいちゃん」

再び振るわれるアチエリの攻撃。だが、それはセエレの剣で簡単に防がれ、弾かれる。

「ふっ」

素早く振るわれるセエレの剣撃。袈裟に斬りかかったかと思えば返す刀で逆袈裟に斬りかかる。

一撃目を何とかかわしたアチエリだったが、返す二撃目は反応しきれず胸元をバツサリと切り裂かれてしまう。

「アチエリちゃん！」

「……ちよつといたいけど、だいじょうぶだよ」

見るからに大丈夫そうな顔はしていない。切られた所を押さえて……それでも懸命に戦おうと前に足を進める。

「ー」

それを見て、さすがの体は動いていた。

動いたすずかに反応して勢いよく剣が振り下ろされるが、それを強引に両手で受け止めめる。

腕が多少は切られたが、致命傷にはほど遠い。

「ぬう」

「はあっ!」

そのまま剣を跳ね上げ、力一杯男を蹴り飛ばす。技術やスピードなど関係無い、ただの力に任せた一撃。セエレはバランスを失った所に蹴り飛ばされ、数メートルほど吹き飛ばされてしまう。

「そこね!」

そこを狙ってアリサが突っ込み、勢い良く殴りかかるがそれは上体の動きだけで回避されてしまう。

「貴様らあっ!」

逆上したセエレが力任せに剣を振るうと、その範囲にいたアリサを捉え、壁まで叩きつける。

「アリサちゃん!」

慌ててさすがが近寄ろうとするが、セエレが鬼のような形相で立ちふさがり、再び剣を構える。

踏み込んでしまった為、回避行動は間に合わない。さすがが観念して目を思いつきり瞑った時。

「ぬあっ!?!」

突然現れた氷の柱によってセエレは動きを封じられていた。

「君たち、大丈夫かい？」

「ヒーロー！ グットタイムिंगなんだホー」

其処にいたのは奇妙な取り合わせだった。

メガネをかけた青年……おそらく、アリサ達よりかは上だろうか。少し華奢な感じだがれっきとした男性であろう。

もう一人は、例えるならしゃべる雪だるまだろうか？ そんなしゃべる雪だるまは陽気にステップを踏みながらこつちに近づいて来ていた。

「あ、ありがとうございます」

「いや、まだヤツは生きてる……ヤツは風が弱点のはずだ。風の特技は何か使えないか？」

メガネの男性は礼を言うすずかを手で制すると、そう問いかけながらセエレを見やる。

氷が溶け、そろそろ動き出してしまおうだろう。

「それなら、わたしがつかえるよ」

青年の問いかけに答えたのはアチエリだった。氷が溶け、動き出すセエレを見てアチエリは無言ですずかを見やる。

すずかは大きく息を吸い、そしてキツとセエレを見やる。

「アチエリちゃん、お願い！」

「うん……『ザンマ』」

突き出したアチエリの腕から衝撃を伴う風の魔法が吹き荒れる。

その一撃は確かにセエレを捉え、その表情が苦悶に歪む。

「まさか！ 私がかんな所で！」

風が過ぎ去った時、其処にはセエレの姿は跡形もなく消し飛んでいた。

「助けてくれてありがとう。えっと……」

「……高城 圭介。君たちは？」

「あ……月村すずかです」

「私はアリサ。アリサ・バニングス」

「そうか……ともあれ良かった、助けることができてる」

圭介と名乗った青年がCOMPを閉じ、雪だるまの姿が消えるとアリサ達も習って同じように仲魔を元に戻す。

「……それにしても……」

暗い闇に覆われた街を見回し、圭介は二人の少女に向き直る。

「この様子じゃ復旧するまで電車も車もダメだろうね……君たちはどうするだい？」

確かに……電気がなければ駅は機能しないだろうし、車もこれじゃあマトモに走れないだろう。現に事故でもあったのか道路は渋滞で車で溢れている。

「……どうやら公園が臨時避難場所になっているみたいけど……一緒に行くかい？」

圭介の提案に顔を突き合わす二人。

それに……と、圭介は続け。

「道すがら、ボクで分かる事ならそのCOMPの機能を教えられると思う」

その圭介の提案を聞き、アリサ達は避難場所に移動する事にした。

だが、停電は一向に復旧せず、結局そのまま一晩公園で過ごす事になってしまったのだが。

第三話 二日目前半

「はぁー疲れたわー」

ぼふつと擬音がしそうな勢いで服装を乱してベッドに体を投げ出す。

せやかて、流星に今日は疲れたんやし、しゃーないと思うんや。

ほんまやったら、今日はお休みで久々に地球に帰ろうとも思ってたんやし。

「……でも、助けることができたら良かったね」

そう言つて、15にしてはけしからん物をぶら下げている金髪の幼馴染が声をかけて来る。

ウチ、いつも思うんや。これって絶対に神様のイタズラやつて。

「そうだね、天井抜いた時はちよつと驚かせちゃったけど」

同じく、男性陣が見たら生唾モンのあられない姿で声をかけてくるもう一人の大事な幼馴染。

いつからか、2人ともトレードマークだったツイントールをしなくなつてから、お父さんとしてはちよつと悲しい気持ちや。

以前に「なあ、何でツイントール止めたんや？ あ、別にエビの味がする怪獣とはちや

うで？」と、聞いたところ。「だ、だってもう子供じゃないし……（！）」って真面目な答えが帰ってきおった。

うん、ボケはスルーかい。

「でも、本来ならすずかちゃんやアリサちゃんと買い物予定だったんだけど……流石に今日は無理かな」

「……そうだね……一応メールは送っておいたけど……返事が無いから忙しいのかな？」

「まったくやな。まるで、ウチらが地球にいけへんように事件が起きたとしか考えられへんわ」

そう言って、思わずウチらの中で笑みが溢れる。

せやけど、その時は気がつかへんかった。

コレが、本当にウチらを地球にいかせん為の上層部の企みやって事が。

二日目

「はあ……まさか野宿になるとはなあ……」

「うー……シャワー浴びたい……」

アリサちゃんの声で目が覚めたけど、最初の感想は汗で気持ち悪いだった。あれから駅が機能していなかったのもあり、結局公園で野宿する事になって……。

「……2人とも、大丈夫？」

声に振り返ると、其処には飲み物と食事、タオルを持った圭介さんがいた。

昨晩は「女性だけで寝るのは危ないかも知れないけど……傍で寝るわけにもいかないし、近くにはいるから何かあつたら声をかけて」と、少し離れた所で見張りをしてくれていたみたいだった。

「あ、圭介さんありがとうございます」

「すみません……」

「本当はもつと買えば良かったんだけど、あの停電だったからたいして残ってな
くって……飲み物も冷えてないけど……」

「いいいえ、助かりますよ」

早くも圭介さんに慣れたのか、笑顔で話してるアリサちゃんは凄いなーと思う。

昨日は道すがら圭介さんにCOMPの機能について色々な話を聞いた。

まず、COMPから呼び出せる悪魔の事、そして悪魔と戦える力を持つるハーモナイザー機能、それと、悪魔の能力を伝えるようになる、スキルクラック。

私達は驚きながらも、同時にそれを受け入れていた。圭介さんは驚いていたけど、そ

れはきつとなのはちゃん達のおかげかも知れない。

なのはちゃん達が使う『魔法』。この存在があったからこそ、こんな超常的な話でも受け入れられるのかも知れない。

それに、私も……。

「ところで圭介さん」

「……何だい？」

考えにふけていた所にアリサちゃんが真面目な顔で圭介さんに向き直っていた。

「私達の頭の上の数字……見えていますよね、これってなんですか？」

「……」

「圭介さんの数字は『1』でも、昨日は『2』だった。これが一日経って減っていると仮定したら……これは0になった日に何かが起こると仮定できるのですが」

そこでアリサちゃんは一度口を止めた。圭介さんの反応を伺っているのだろう。圭介さんは口を閉ざしたままだ。

「これだけの機能について知っていたのに、この数字にだけは圭介さんは触れなかつた。それは、この数字が良くない意味だって知ってるからじゃないんですか？」

「……鋭いね、キミ」

「父の影響かも知れません。父が商売人なモノで」

商売人ってレベルじゃない気がするけど……此処は口に出さないでおく。

「頭の上の数字は……これは寿命らしいんだ……つまり、ボクも君たちも、後数日の命ってわけさ……」

「……え……」

後、数日の命？ 私達が？

「そうなんですか」

「そう、だから……」

「じゃあ、それを増やす為に頑張りましょうか」

「……え？」

衝撃的な事実。それを受け止めた上で尚アリサちゃんは前を向く。

「だって、このままじゃ死んじゃうって事でしょ？ 恐らくは悪魔にでも殺されちゃうのかな。そんなの絶対にゴメンじゃない。だったら立ち向かわないと」

「き、君は自分の言ってる意味が分かってるのかい？」

「それはもちろんですよ。でも、私達の親友が昔実践したんです。どんな難題でも諦めなければ解決できるって」

あ……うん、そうだったね。

「……ええ、私達の大事な親友達はそうやってどんな困難にも立ち向かって行きました

た」

「だから、こんなノストラダムスもビックリな予言に踊らされてたまるかってもんですよ」

「君たち……」

「だから、圭介さんも悩まないで下さい」

「え……」

意外そうにアリサちゃんを見る圭介さん。うん、それは私もだったんだけど。

「何があつたかなんて私は聞きませんし、聞く権利もありません。だけど、色々悩んでいるのくらい見れば解ります。もつと自分を信じて下さい。少なくとも私たちは圭介さんに助けられました。圭介さんの行動で、私たちは救われたんですよ」

「あ……」

「だから、自分の考えに自信を持って下さい」

アリサちゃんはいきなり口を閉じ、じつと圭介さんを見つめる。

やがて、肩の力を抜いた圭介さんは初めて微笑んで。

「……すまないね、ありがとう」

其処には今までの何処か弱々しく見えた圭介さんの影は見えなかった。

「さーて、色々解決した所で家に帰りますかー」

「うーん……だけど、携帯も通じないみたい」

昨日の晩から何ども試しているが、携帯は常に圏外を表示していた。

「おかしいわよね、普通停電しても基地局何かには予備電源とかあるはずなだけけど」

「……まあ、とりあえず駅に向かおうか」

「そうですね。さーて、せっかくだから行き道がてらに『フレイムアイズ』で何ができるか確認しないと」

「ふれいむあいず?」

アリサちゃんがいきなり良く分からない事を言い出すから、思わず変な声で聞き返しちゃった。でも、フレイムアイズって何?

「ああ、なのはのレイジングハートやフェイトのバルディッシュみたいに、どうせなら私も名前をつけてみようかなーと思って。ほら、このCOMPのカラー赤だし」

ちよつと照れた感じでアリサちゃんが答えながら手にしたCOMPも見せてくれる。確かに真っ赤なカラーリングは名前も、アリサちゃんの性格にもピッタリかも知れない。

「それなら……私のは『スノーホワイト』かな。よろしくね」

私は手にした真っ白なCOMPを見て、そう呟く。

この時、圭介さんが少し可哀想なモノを見るような目をしていた気がしたけど、あえ

て見ない事にしました。

「あーただ今山手線沿線にて毒ガスが発生した為、沿線を封鎖しています。安全が確認出来るまで暫くお待ち下さい」

駅に行つて最初に見えたのは物凄い人だかりと、ぐるりと周囲を囲む自衛隊のバリケードだった。

何でも今の自衛隊の人の放送だと、毒ガスが出たつて話だけど……。

「妙ね」

どうしようかと悩んでいたら、急にアリサちゃんが独り言のように呟いた。一度深く考えるように視線を落とし、そして言葉を続ける。

「急に毒ガスが発生した割には手際と準備が良すぎない？　まるで、この閉鎖が決定事項だったかのような感じだわ」

「え、それって……」

「そうだね……ボクも同じ事を思ってた。多分、この封鎖は毒ガス何かが理由じゃない」

毒ガスが理由じゃない。それってつまり……。

「悪魔でしょうね。このタイミングからして、政府はすでに悪魔が発生する事を知っていた……？　いや、流石に考えすぎかな？」

「いや、あながち的外れでも無いかも知れないよ。可能性はあると思う」
アリサちゃんの推理に圭介さんが付け足す。

「……とにかく、此処にいても通れそうにないね……他を探そう。何処か封鎖されて
いない場所があるかも知れない」

圭介さんの言葉に頷き私達はこの場を去る。

この時は思いもしなかった。昨日の事何かが大した事の無い。
これからは本当のサバイバルになるなんて事を。

ピピッ。

l e t , s e n j o y s u r v i v a l !